

NARO Research Prize Special I

温暖化に対応した広域適応性水稲品種 「にこまる」の育成と特性解明

水稲「にこまる」開発グループ

坂井 真¹⁾、田村克徳¹⁾、岡本正弘¹⁾、梶 亮太²⁾、平林秀介³⁾、溝淵律子⁴⁾、
深浦壯一⁴⁾、西村 実⁴⁾、八木忠之⁵⁾、森田 敏¹⁾

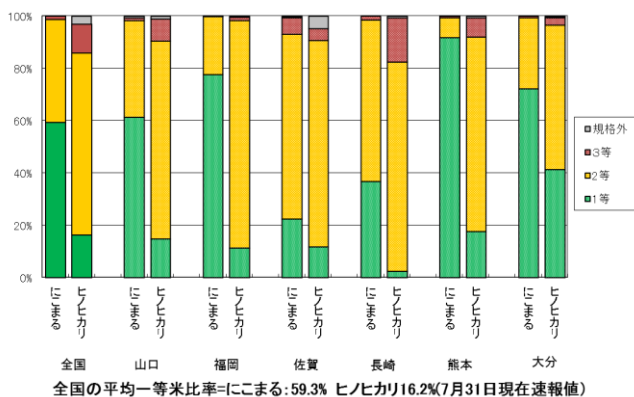
(¹九州沖縄農業研究センター、²東北農業研究センター、³作物研究所、⁴元九州沖縄農業研究センター、⁵元中央農業総合研究センター)

研究の目的・背景等

近年、水稲登熟期の気候の温暖化に伴う影響で、日本各地で玄米の品質低下が発生している。とりわけ、西日本の基幹品種「ヒノヒカリ」は大きな影響を受け、一等米比率が低迷しており、これに代わる良食味品種が求められていた。

研究の概要

平成16年度に育成された水稲品種「にこまる」は、「ヒノヒカリ」を上回る多収性と、高温条件下でも品質低下が少ない特性を両立した画期的品種である。優れた収量、品質を支える登熟能力の高さは、穂揃期における茎内のNSC(非構造性炭水化物)の蓄積量が多いことに由来している。「にこまる」は、平成22年の記録的高温年でも各地で良好な検査成績を示した。食味も良く、日本穀物検定協会の「米の食味ランキング」で最高ランクの「特A」評価を3年連続で受けており、食味コンテストでも多くの入賞を果たしている。「にこまる」の普及面積は平成22年度現在約4500haで、西日本を中心に普及拡大中である。



平成22年産米の検査成績(農林水産省発表値)

